



鯖江市地域活性化プランコンテスト(第17回)

鯖江市に見る 「市民主役」のまちづくり 成功のカギと未来への展開



福井県
鯖江市

「めがねのまち」として知られる鯖江市は、「市民主役のまちづくり」においても活気にあふれる。女子高校生を中心としたプロジェクト「鯖江市役所JK課」は国連でも紹介され、全国から学生が集まる「鯖江市地域活性化プランコンテスト」は18年続く。こうした活動が評価され、2024年には「2024CRMベストプラクティス賞」を自治体で唯一受賞している。今年、市制70周年を迎える鯖江市は、市民参加型のまちづくりを文字どおり実践し、その歩みを止めない。地方都市が抱える課題を解決するカギが、ここにはある。担当者に話を聞いた。

市民と市が主語の“わたしたち” で始まる「鯖江市民主役条例」

日本海に面する福井県のほぼ中央に位置する鯖江市は、面積84.59km²と県内では2番目に小さな市域ではあるが、人口は約6万8,000人、人口密度は県下1位のまちだ。古くから「ものづくりのまち」として発展し、特にめがね産業では、イタリア、中国と並ぶ世界三大産地の一つとして知られる。

そんな鯖江市には、“自分たちのまちは自分たちがつくる”という市民主役のまちづくりを進めることを目的とした「鯖江市民主役条例」がある。市民および市を意味する“わたしたち”で始まるこの条例は、2010年4月に条例施行となり、今春で15年が経つ。

同時期からは、「提案型市民主役事業化制度」を開始している。それまで市が行ってきた公共事業を見直し、市民自らが行ったほうがよい事業、市民に託したほうがよい事業等を市民に募集をかけ、市民や民間組織に業務委託というかたちで担ってもらってきたほか、市民からの発案については、市もそれに応えるかたちで市民主役を強力に推進し、さまざまな取り組みが事業として実現している。

今でこそ、市民主役、市民の声を聞くというのは自治体において当たり前の風潮にあるが、当時としてはいち早い取り組みだったはず。鯖江市市民生活部市民主役推進課の竹内陽一さんに話を聞くと、こんな答えが返ってきた。

「条例として明文化したのは15年前ですが、その土台はさらに15年前にさかのぼります」

一つの成功体験から生まれた 「わたしたちはできる」という土台

1995年、「世界体操競技選手権大会」が鯖江市で開催された。それまでこの大会は欧米の大都市が開催地に選ばれていたが、日本ではもちろんアジア初の開催地として、人口7万人に満たない鯖江市が選出されたのだった。

「ほんとうにできるのだろうか」という不安が、当時、無かったとは言い難い。しかし、選手の受け入

れから大会運営、PR等々多岐にわたる役割において、およそ3万人に及ぶボランティアの協力によってこの大会は成功を収める。時代は、まだボランティアという概念が浸透する以前のこと。

「この成功体験が、“市民主役”のすべての始まりであり土台になっていると言えます。これをきっかけに、市民と行政が協働すれば、すごく大きなことができる、すごくいいことができる、といった機運が双方に醸成されたと言ってもいいかもしれません」（竹内さん）

JK 課に JKOG 課、OC 課まで！？ 老若男女がまちづくりに乗り出す

こうして市民と市の双方に「わたしたちはできる」という土台が生まれ、市としては「居場所と出番をつくれば、市民はまちづくりに参加してくれるのでは」と、先の制度が整えられていったという。

では、具体的にどのようなまちづくりが実現してきたのだろうか。2014年に発足し、国連でも紹介された「鯖江市役所JK課」はその一つだ。

「JK＝女子高校生は、行政から最も遠い存在という仮説のもと、JKが自由な環境下で自分たちがやりたいことを企画し、大人を巻き込んでいくと、何か面白いことが起きるのではないかという実験的プロジェクトとして発足したのが始まりです」（竹内さん）

注視したいのは、既存のプロジェクトに彼女たちを巻き込むのではなく、彼女たち自身がやってみたいまちづくりを提案し、地域と連携して取り組むといった点だ。名称の奇抜さから賛否が割れたスタートだったが、先進的な取り組みが評価され、のちにたくさんの賞を受賞している。

現在では、JK課の卒業生による「JKOG課」も発足し、現役メンバーに伴走しながらまちづくりに協力するといった構図も育まれているという。

女子高校生の活動に触発されたのが大人の女性たちだ。おばちゃん（Oba-



鯖江市役所JK課のステッカー

chan) の略字として「OC課」を立ち上げ、女性ならではの視点と発想で鯖江市を元気に住みやすくしたいと活動を開始。全国OCサミットを開催したり、市長選挙の際には候補者の主張や政策をディスカッションする場を設けたりなど、幅広い活動を展開している。

毎夏、日本全国から学生が集まる 鯖江市地域活性化プランコンテスト

ところで、こうしたユニークな発想はどこから生まれるのだろう。それを支える存在の一つに「鯖江市地域活性化プランコンテスト」がある。じつは、先のJK課もこのコンテストから生まれたという。

「鯖江市地域活性化プランコンテスト」とは、“市長をやりませんか?”をキャッチコピーに、鯖江市が活性化するプランを学生に提案してもらうというコンテストだ。2008年の開催以来、毎夏実施され、今年で18回目を迎える。

「東京で生活をしていたある日、鯖江に帰省してみると商店街が寂しくなっている状況を目にして、何

かできることはないかと動いたのが始まりです」

そう語るのは、コンテストの企画運営・事務局を務めるNPO法人エル・コミュニティの竹部美樹さんだ。現在は、大学生と高校生の二部制で、理想の街やつくりたい鯖江の未来をデザインし提案するという未来創造型のコンテストとなっている。

場所は鯖江市内にある本山誠照寺。毎夏、日本全国から集まった学生はここを基点に3日間を過ごし、ヒアリングからプランニング、そしてプレゼンテーションを実施する。最終日のプレゼンには、市長や議員、企業や市民の方々が集うが、プラン発表は行政に対してするものではないという。

「大事なのは市民の共感です。市民の共感を得ない事業は長続きしないからです」(竹部さん)

学生から発案されたプランの中で、事業として実現したものは多々ある。



お話をうかがった竹部美樹さん
(NPO法人エル・コミュニティ代表)

2024年に開催されたコンテスト (第17回) のポスター



コンテスト (第17回) の普及活動



コンテスト (第17回) のスタッフ



鯖江市地域活性化プランコンテスト（第17回）のようす。
地元の誠照寺に合宿して行われる

例えば、JR（現ハピラインふくい線）鯖江駅の2階に空きスペースがあることに着目し、「図書分館＋カフェ」をオープン。地域の人がお茶をしに行くほかビジネスでも利用されているという。これは、駅に図書館をという学生のアイデアにNPO法人が動き、カフェ

が併設された図書館となった。それにより収益化につながった。

市内にある西山動物園では、レッサーパンダのSNSフォロワー数が多いという背景から、「レッサーパンダ・アイドル化計画」が実現。レッサーパンダをモチーフにした商品のグッズ化のほか、今年9月には全面ラッピングの路面電車が市内を走る予定だという。市民の宝であるレッサーパンダが笑顔と経済の輪をつなぐ点も朗報だろう。

コンテストの運営は地元学生が主体 そこに地域や企業の賛同が集まる

まちづくりの担い手がない、どうすればまちが活性化するのかわからないというのが、現在、多くの地方自治体が抱える課題だろう。しかし鯖江市には、縁もゆかりもなかった学生が全国から集まり、



2025年開催の第18回鯖江市地域活性化プランコンテスト実行委員会のメンバー

未来の鯖江を真剣に考えてくれるという循環が生まれている。しかも1年、2年ではない。プランコンテストは18年途切れることなく継続中だ。成功の秘訣はどこにあるのだろうか。

「それは間違いなく学生主体の運営という点に尽きると思います。企画から営業、当日の運営まで福井県の地元学生が主体で動きます。大人はあくまでフォローアップという立場です」（竹部さん）

じつはこのプランコンテスト、スポンサーには地元企業をはじめ世界的にも有名なIT企業なども名を連ねるが、学生主体ということで賛同してくれる企業も多いのだという。

それは本山誠照寺も然りだ。開催場所のみならず、学生の宿泊場所として寺の隣にある研修所も提供している。さらに、3日間の学生の食事については地域の方々が協力してくれているという。

若者の声を聞き信じて任せてみると 次の担い手も育つという好循環が

地元学生が運営して全国から学生を受け入れるという構図は、学生同士の交流にも活気をもたらす。参加した学生の中には、プランコンテストを機に再び鯖江に来てくれる人もいれば、運営側の学生の中には県外希望だった進路を変更して鯖江に残る人もいう。しかし影響はそれにとどまらない。

「プランコンテストの会議は商店街のテナントで行ってきたのですが、通りすがりにそれを見ていた小中学生が高校生・大学生になって参加してくれるというケースもあります。お兄さん、お姉さんが面白そうなことをやっていたので、と」(竹内さん)

市民主役のまちづくりが実現し、なおかつ次の世代の担い手も育っているという好循環。行政として要因はどこにあると考えるのか。

「信じて任せることだと思います。それと、市民の声を聞くこと。プランコンテストのおかげで、若者や市民の声を聞くことは当たり前という文化が鯖江には根付いたとも言えます」(竹内さん)

竹内さんには、先輩から受け継いだものに「市民一流、市役所二流」という言葉があるという。

「自分たちはあくまで黒子。市民の方の居場所と出番づくり、地域の担い手が出てくる土壌づくりこそ、

行政の仕事だというスタンスも大事にしています」

10年先も活気が持続するように 危機感とチャレンジを忘れない

2020年の国勢調査によれば、鯖江市は県内で唯一人口増加となったが、それをピークに近年は減少に転じている。これには危機感を募らせる。

「『住み続けたい、将来また戻って来たい』と内側から選ばれるまちを目指すとともに、『住んでみたい、挑戦したい』と外側から選ばれるまちを目指します。そのために、チャレンジをし続けなければいけないと思っています」(竹内さん)

「市民主役のまちづくり」のトップランナーとして走り続けてきた鯖江市が、今後どんな取り組みを展開していくのか。ますます目が離せない。



お話をうかがった竹内隆一さん
(鯖江市市民生活部市民主役推進課)



2011年、眼鏡の鎖でギネス記録を更新

◆コンテストから実現したプラン（一部）

<第1回提案プラン実現>

- 遣東使（2009年度実施）
- めがねギネス（2011年5月5日実施）
- キッズチャレンジ（2009年度実施）

<第2回提案プラン実現>

- 西山公園、愛の鐘（2009年度に設置）
- めがね祭り（2010年度より毎年実施）

<第3回提案プラン実現>

- トキワ荘プロジェクト（2011年度予算化）

<第4回提案プラン実現>

- サバ男、サバ子の鯖江大好きPR隊：さばえブランド大使（2012年8月スタート）
- 中国の学生と鯖江市民の交流（2012年8月から毎年実施）

<第5回提案プラン実現>

- 鯖エージェント（2013年11月から毎年実施） ← 学生団体with主催

<第6回提案プラン実現>

- 鯖江セレクト図書分館！（市民協働パイロット事業：2015年1月オープン）

<第9回提案プラン実現>

- HyperHana道場！IT教育による鯖江ブランド構築（Hana道場が実施）
- 若者が住みたい街を作るための鯖江大学（サバエ×ワカモノ夢創造大学事業）

<第11回提案プラン実現>

- Sabacoプロジェクト：お互いにいいところを見つめ、認めあえる社会へ！（2019年2月11日実施）
- 鯖江の食材で鯖江をチャージしよう！（2019年3月10日実施）
- 鯖江で貿易しませんか？～五感と戦略入り乱れる貿易ゲーム～（2019年3月29日度実施）

<第14回提案プラン実現>

- 高校生版：交流寺（2022年実施：鯖江市提案型市民主役事業）
- 大学生版：めがね婚（2022年実施）

<第17回提案プラン実現>

- シンガーサバエライター ～音のお土産を作る～（2025年3月実施）
- レッサーパンダアイドル化計画（2025年度レッサーパンダ×市民主役のまち推進事業として予算化）